一つの秘密　正宗白鳥

一つの秘密

正宗白鳥

新潮社版

一つの祕密

昭和三十七年十一月二十六日　印刷
昭和三十七年十一月三十日　發行

定價　五〇〇圓

著者　正宗白鳥
©正宗つ禰

發行者　佐藤亮一

印刷　塚田印刷株式會社
函刷　錦明印刷株式會社
製本　神田加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京(341)七一一一～九
振替東京八〇八番

亂丁本はお取換へします。

© 1962 by Tsune Masamune. Printed in Japan.

白鳥文集『一つの祕密』目次

I

リー兄さん……昭和三十六年十月號「群像」……八
「笑ひ」の賣買……昭和三十六年一月號「小說中央公論」……一六
一つの祕密……昭和三十五年十一月號「中央公論」……二〇
果てしなき眠り……昭和三十五年七月「週刊朝日別册」……二三
死んだやうな平和（戲曲）……昭和三十二年一月號「群像」……二九

II

感想斷片……昭和三十七年五月「東京新聞」……四八
うかれ女……昭和三十四年九月單行本「六世中村歌右衞門」……五二
歩行と觀劇……昭和三十七年三月「讀賣新聞」……五五
陳腐なパリを好む……昭和三十四年二月「世界紀行文學全集」（月報）……五八

旅行の興味……昭和三十六年二月號「世界」……六〇
冬の法隆寺詣で……昭和三十三年一月「讀賣新聞」……六五
ひとり旅……昭和三十七年一月號「文藝春秋」……六八
遊行記……昭和三十四年十二月？掲載紙不明……七〇
「東京」に住みて……昭和三十五年十月號「世界の旅、日本の旅」……七三
心の故郷……昭和三十五年一月「朝日新聞」……七四
青春の夢を追ふ……昭和三十二年一月「日本經濟新聞」……七六
思ふこと（御信心勸誘。古書讀むべし。ある映畫。內村鑑三。かう思ふことの自由。獨斷是非。モデル問題。女といふもの。世界の短篇小說。俊子の碑。次のページ。素通り見物。交通事故。輕井澤の一日。文字の忘却。郵便箱の中。蚊の話。悲壯なる空想。運命は理不盡？。暑さに親しむ。）……昭和三十六年二月～七月「產經新聞」…八三

Ⅲ

恐怖と利益……昭和三十五年五月「產經新聞」……一〇一
欲望は死より强し……昭和二十九年六月號「文藝春秋」……一〇四
歷史に現はれた人間の欲望……昭和三十六年一月「產經新聞」……一一〇
作品と批評……昭和三十六年一月「讀賣新聞」……一一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小說は心の糧か……昭和三十三年十月「東京新聞」……一二五
新人論……昭和三十四年一月「讀賣新聞」……一二〇
一種の文學觀（A）……昭和三十五年十一月「產經新聞」……一二三
世相の文學的解釋……昭和三十四年十月號「文學界」……一二五
「バナナ」を讀んで……昭和三十四年九月「讀賣新聞」……一二三
「座談會　明治文學史」……昭和三十六年七月「朝日ジャーナル」……一二五
「晶子曼陀羅」を讀む……昭和二十九年十一月「讀賣新聞」……一二八
小說の氾濫……昭和三十年十月「東京新聞」……一二九
輕井澤にて（古い八月の日記から）……昭和三十六年八月「讀賣新聞」一四一
「ひもじい月日」……昭和三十年一月「讀賣新聞」……一四三
「楢山節考」……昭和三十一年十月「讀賣新聞」……一四四
「ギリシア悲劇全集」……昭和三十六年五月「朝日新聞」……一四五
「縛られたプロメーテウス」……昭和三十五年三月「讀賣新聞」……一四七
讀書の樂しみ……昭和三十三年一月號「婦人之友」……一四八
讀書への愛著……昭和三十三年二月「讀賣新聞」……一五一
一種の文學觀（B）……昭和三十六年一月號「文學界」……一五五
「わが終末記」……昭和三十七年一月「朝日新聞」……一五九

Ⅳ

青年の木乃伊……昭和三十四年四月・五月「東京新聞」……一六二
「夢の浮橋」を讀んで……昭和三十四年九月「讀賣新聞」……一七四
鷗外の死をめぐつて……昭和三十年五月號「文藝」……一七六
「腕くらべ」と「妾宅」……昭和三十四年七月號「中央公論」……一八〇
荷風追憶……昭和三十四年五月「產經新聞」……一八六
弔辭—室生犀星君—……昭和三十七年五月號「心」……一八七
秋風記（知人の死。吉井勇と和辻哲郎。秋江と梢風。青野季吉と宇野浩二。睡眠藥遊び。人生の旅。作家と相撲。カブキ。今日一日。舌をかんで。）……昭和三十六年十月「讀賣新聞」……一八九
神よ……昭和三十三年一月「東京新聞」……二〇九
明治の精神……昭和三十四年十二月「日本の歷史」（明治の日本）……二一一
生きるといふこと……昭和三十三年一月「毎日宗教講座」……二一七
このごろ疑問に思ふこと……昭和三十五年八月「讀賣新聞」……二二六
編者後記……（中島 河太郎）……二三一

白鳥文集

『一つの祕密』

I

リー兄さん

「リー兄(あに)さん死す」との電報に接した時には、眞木村家の長男で相續者になつてゐる鐵造は、月並のあはれを感ずるとともに、輕い安心を覺えた。リー兄さんと云つても、眞木村家十人きやうだいのうちの四男に當るのだが、この男一人が妻子もなく定職もなく、孤獨貧窶の生活を續けて來たので、東京で戰災に罹つた後は、瀬戸内海のほとりの故郷の生家へ歸つて、兎に角其處で生きてゐたのであつた。生れた家だから、先祖から傳はつたぼろ家へ、自分も住居權がある如く入り込んだのだが、生活は誰の世話にもならぬと、沈默のうちに覺悟してゐたらしく、兄弟の誰にも、生活費の援助を賴んだことはなく、兄弟の方で彼の窮狀を察して、時々多少の金錢を惠んでやつても、決して感謝の手紙を出したことはなく、着いたか着かぬか分らぬから知らして呉れと云つてやつても、返事がないのであつた。でも、金を返して來ないのだから、自分で使つてゐるのだと、兄弟間の笑ひ話になつてゐた。

兩親に似て、自分々々の生活を大事にする常識家揃ひのきやうだいのうちで、彼だけは異樣な存在であつた。彼のギブンネームは、林藏であつた。この眞木村林藏は、弟や妹に向つては、自分で自分をリー兄さんと云つて、兄たる權威を示してゐたらしかつたが、それが習ひとなり、彼の愛稱のやうになつて、兄でも誰でも彼をリー兄さんと呼んでゐた。父親は或日、きやうだい中での出世頭(がしら)の長男の鐵造に向つて、「お前はリーに似てゐる。でも、お前はちやんとして世を渡つてゐるんぢやからそれでえい譯ぢや」と、眞面目に云つた事があつた。子を見る事親に如かずと云はれてゐるが、鐵造は意外な父親の批判を受入れて、自分とリー兄さんとの類似を檢討したことがあつた。檢討したつてよく分らないが、たゞ運次第で、彼の生涯が我の如くであり、我の生涯が彼の如くであつたのか知れない、と思つたりしてゐた。

兎に角、鐵造は、避暑のため山へ行かうとした企てを中止して、故郷へ行つて死者を弔ふことにした。かねてリー兄さんの末路の處置は、鐵造の身に振りかゝつて來

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るのではないかと、氣づかつてゐたので、これが急速に簡單に解決されたのは、彼我のために却つて幸福であつたのだ。

故郷の家には、鐵造の表札が長い間の風雨にさらされて、薄汚く、ぼんやり姓名を現はしてゐるのが、彼が歸郷するたびにいつも目につくやうに今度も目についた。東京の家には、彼の相續者たるべき青年の名の記された眞新しい表札が掛けられてゐる。輕井澤の別宅には、彼の表札はなくつて、管理者の名前が大きく打立てられてゐる。先祖傳來の故郷のぼろ家にだけ、老後の彼を表象してゐるやうな表札がかゝつてゐるのである。家の中へ踏込むと、この前の歸郷に見たよりも、淸らかで、いくらか明るい感じがした。奥の間に女の寢息がしてゐたが、これは、眞木村家の血族の一人としての、ここの管理人の主婦で、數十年來ここを自分の家として、數人の子女を育てたのである。同居者のリー兄さんの最後は、この夫妻だけで見屆けて、跡始末をしてやつたので、彼女は疲勞してゐるのであらうと、鐵造は推察して、眠れる彼女に聲を掛けないで、靜かにあちらこちらを見廻つてゐたが、座敷の片隅から、ラヂオが株式放送をしてゐるのが、あたりと不調和で異樣に感ぜられたのであつた。

便所に近い一室には、故人の靈が型通りに祭られてゐた。一生寫眞を撮らなかつたらしい故人の寫眞は掲げられてゐなかつたが、筆跟新たな物々しい居士名を記された位牌が据ゑられて、くだものや菓子などが供へられ、誰かの俳句や和歌らしいものの貼りつけられてゐる小屏風が逆さに置かれてあつた。煎香の煙も漂つてゐた。それに、朽ちて崩れてゐた筈の、この部屋が小ざつぱりした上敷で蔽はれてゐた。行倒れ同樣の死樣をするのではないかと、かねて、長兄などに空想されてゐた林藏も、かうした世間並の葬儀に惠まれてゐるらしいのを、鐵造は不思議に思ひ、そして、その位牌の前にちよつと額づいて、木魚で鎬を叩いて、煎香にも火をつけた。

かうして、死者に對して、鐵造が柄にない月並の行爲をすると、林藏の靈も、月並の擧動をするのであらうか。魂髣髴として、一生涯のおのが姿を現はしたのである。

わしは頭の先から足の端まで眞つ黑のやうだ。兄弟のうちでも際立つて黑いのだ。白々とした妹なんかもあるなかに、わしばつかりが眞つ黑なのは不思議なやうだが、

それがさうだから仕方がない。黒くつて汚い。海の漁夫などは汐に燒けて黒いのだが、わしのは木地の黒さだ。わしはわしがそんな人間だと、子供の時分から次第に考へるやうになつた。わしが女との縁を切るやうになつたのもそのせゐだ。わしは徹底的に女嫌ひになることに努力した。そして、それだけには成功した。兄弟はみな人並の結婚をして、男の子や女の子を生落してゐるが、わしだけは、そんな眞似はしなかつた。いや、わしも結婚の眞似はした。眞似の眞似はした。親爺が親の義務として、押付けたので、押付けられるまゝに、默つて三々九度の儀式をすました。それで、新婚夫婦は、古風に造られてゐる離れ家で新生活をはじめる事になつた譯だが、わしには、わしとは何の縁もない一人の女性が側にゐて、極りの惡さうな顏してゐるのを興もなく目に觸れてゐるに過ぎなかつた。わしの顏はさぞ黒々と彼女の目に映つたであらうが、彼女の顏は白かつた。なんにも話はしなくつて、わしが不斷とちがつた柔かい蒲團を被つて眠ると、彼女もいつか寢床に就いたらしかつた。新家庭の筈であつたが、食事は本宅でみんなと一しよに採ることになつてゐたので、夜が明けると、女中の知らせで、一族團欒の席に就いた。彼女の膳が一つ、適當の位置に置かれてゐたのだ。彼女がわしのお給仕をするのではなかつた。

食事が終ると、わしは、極つた時刻に當時奉職してゐた隣村の小學校へ出掛けるのであつたが、新婚者として村の者に見られるのを嫌つて、裏の山道を通つた。不斷でもわざとこの山道を通る日が多かつた。勤めを終つて歸つてからも、離れへは行かないで、今まで通り、本宅の二階の一隅へ入つて、默々の孤獨の時を過した。そして、夜おそく、不承々々に離れへ行つて、そこにちやんと敷かれてゐる夜具のなかへ入つた。花嫁は一日中、わし以外の家の者と仲よささうに話をしてゐたし、女中や近所の人にも親しさうに口を利いてゐた。兩親も、新夫婦の間について何の疑惑も抱いてゐないらしかつた。さういふ變梃な有樣で日また日が續いた。

處女と云ふ者はかういふ者かと、わしは奇異な感じがしだしたが、或夜わしは「わしには子供を生む力はないのぢや」と、思はず口に出した。この奇異な言葉に、彼女は驚いたやうだが、その驚きも直ぐに消えて、しをしをした顏に一雫の涙がこぼれた。わしでも、その時一生

に一度の、女性に對するあはれを感じたのだ。そして、その翌日、父の前へ出て、咄々たる口調で離別を强要した。「なぜ初めに斷らなかつた」「それはその通りだ。わしだつてさう思つてゐる」

腑甲斐なくも、結婚の眞似でもしたくつて斷らなかつたのか。

鐵造は、淡い煎香の煙のほとりに漂つてゐる林藏の死後の述懷を聞いてゐるやうな氣持になり掛けてゐると、さつきから隣室で深い寢息を洩らしてゐた主婦が、ふと目を醒まして來訪者を一瞥すると、あわたゞしく起上つたので、まぼろしの聲の止切れた思ひをした。

「今度は御苦勞だつたね」と云ふと、

「一時途方に暮れたのですけれど、どうにか片付きました。何年もお風呂に入らないで、垢だらけになつてる身體を、わたし一人で綺麗に洗つて、こんな場合の用意に調へてゐた浴衣を着せて上げました。一昨日亡くなつて昨日火葬にして、お骨もしつかりと壺に收めましたが、こちらの村でも隣村共同の火葬場が出來たのが、リー兄さんのためにも幸福でした。今までのやうに土葬だつたらどうします？　この暑さに穴を掘るのは大變なことぢやありませんか。それが町役場へ電話で依頼しただけで、大勢で引取りに來て吳れて、錦らんの蔽ひをしたお棺に入れて火葬場へ運んで吳れるんです。骨揚げまで一切の費用が極められて、餘分のお金は入らないことになつてゐます」

「それは便利になつたね。こんな暑い時分に死骸を埋める穴を掘らされるのはたまらないだらう。誰がやつて吳れるだらう」

その夜は、鐵造と此處の夫婦と三人は、宵のうちをリー兄さんの追憶話で過した。ここの管理人夫婦とリー兄さんとは、終戰後十餘年間も、お互ひに好ましからぬ同居を續けたので、口喧嘩もよくしてゐたが、それだけに、リー兄さんに關する話の種は、彼等夫婦が最も多く所有してゐた。入江を見下して眺めはよくつても、障子は棧だけが殘つてゐて、疊は破れたり凹んだりして正體のないほどに朽ちてゐるだゝつ廣い二階は、この孤獨の住者に獨占されてゐたのだが、その住者は殆んど掃除はせず、十餘年の間入浴をしないやうな不潔生活で、夥しく蚤が

發生するほどで、爽かな海風もこの二階の廣間を通つて階下へ流れ落ちると、異樣な臭氣を放つさうであつた。それで、階下に住む管理者の家族は、十數年間絶えず警告してゐたのだが、リー兄さんには他人の警告などは馬耳東風なのだ。

この不潔の塊りであつた彼も戰災に罹るまでの數十年間は、東京生活をしてゐたので、東京に住んでゐた間は、兎に角人間らしい身裝をしてゐたのだ。東京では概して美術修業をしてゐた。戰災の打擊を受けたためか、不潔の塊りになつた彼が、美の表現を志してゐたのは不思議である。青年時代、田舍の小學校の教師をしてゐた彼は、俸給のすべてを貯蓄してゐた。酒は飲まず煙草は吸はず、何等の無駄費ひはせず、衣食は一切父母の負擔に任かせてゐたのだから、可成りの貯蓄は出來たので、それを資本として東京行を決行した。それで學校へ辭職屆を出した。そこの校長は林藏の父親に會つた時に、「林藏さんは東京へ修業にお出掛けになるさうで」と、祝意を述べると、父親は、當人からは何も聽いてゐなかつたので、びつくりした。それで、早速當人に訊きたゞしたが、當人は、むにや〳〵と口の内で答へただけで、父親が重ねて詰問しても、いかなる方針で出掛けるかはつきりした返事はしなかつた。「リー兄さんが東京へ行くんぢやとい」と、弟妹は、事の意外を面白がつて囃し立てた。長男の上京の時には、長男は、祖母に向つて、「わしは東京の學校へ行かう」と、ねだつて、祖母から父親に報告させただけで、事は順調に運んだのであつた。林藏の上京については、父親はにがり切つた顏してゐたが、學資無用との事でもあつたので、つまりは當人まかせで放任した。

管理者の主婦はその話に連れて、「昨日近所の八十を過ぎたおそよといふお婆さんが、お二階の旦那樣がお亡くなりになつたさうで、おいたはしい事いたしましたと、くやみを云ひに來ました。多分昔リー叔父さんの子守として此處に雇はれてゐたので、なつかしかつたのでせう。その時の昔話に、あの方は、お小さい時、祖母さんにも粗末にされてゐたやうでした。（リーよ御飯お上り）とお呼びになつても、外のぼつちやん、嬢さんには焚き立ての溫い御飯をついで上げなさつとるのに、リーぼつちやんにだけは、殘りの冷飯を上げなさるんです。わたしは、お可愛さうな氣がしたのを、今も覺えて居りますと

話してゐました」と話した。

「さう云へば、リーが何かで祖母さんに怒られて、お灸を据ゑられたのを、僕は覺えて居る。外の子供はそんなことはなかつた」と、鐵造は云つて、「祖母はどの孫に對しても分け隔てはなかつた筈だが、リーだけは、何となく安つぽく見られたのか。家には大勢子供があつたのだが、リーは、便所の側のこの部屋に寢かされてゐた。二階のあの部屋は上等部屋で、僕の寢室にしてゐたのだ」

「リー叔父さんはからだが惡くなつて、二階からの便所通ひは不自由だから、私がこの新しい上敷をここに敷いて、二階から下りて來て、此處に寢るやうに勸めたのですけど、片意地を張つて、どうしても下りて來ないのです。さうしてるうちに、腹匐ひになつて、二階から下りて來る途中で、大しくじりで、汚いものが垂れ通しになつたのです。その跡始末が大變で」と、主婦はその時を想像しながら眉をしかめた。

「リーも片意地を通しながら、つまりは人のお世話になつたんだね」

「でも、リー叔父さんは、死ぬる覺悟はしてゐました。强ひてお醫者に診て貰ふことにしたのですが、お醫者さんが、あなたは何處も惡くはないんだから、元氣をお出しなさいと力をつけても、自分はもう駄目だと云つて覺悟してゐました。それからわたし達が氣がつかなかつた事でしたが、最後に便所へ通ふ前に、側の紙切れに遺言狀を書いたのです。繪を書く筆で」

「リーの遺言狀とは不思議だね。誰に當てて、何を書いたの？」

「わたしに當てて。いろ〳〵お世話になりましたと」

「リーがそんな事を云ふのは意外だ。死ぬる時にはそんな氣になるものかなあ」

「それから、自分は以前から肺病なので、人にうつしちや惡いから、それで二階から下に降りぬやうにしたのだとも書いてありました。肺病なんかぢやないんですよ。獨り極めにさう極めて、不斷高い藥を買つて飲んでゐたらしいんです。お醫者さんに訊くと、それは見當ちがひの藥なのに」

「その高い藥代はどこから取るんだね。繪が多少賣れるんだらうか」

「御當人は自分は大變えらい畫家だと思つてるらしいんで、安つぽく賣らうとはしなかつたんです。賣らうと思

へば隨分買ひ手があります。村の工場は近年は大變な繁盛で、他所から働きに來とる人で村に居すわつて、新たに家を建築する人も續々あるんです。それで、家の飾りに繪を欲しがる人もあるんだから、リー叔父さんの繪だつて賣り物になります。わたし達もたび〳〵お世話しようと云ふこともあつたんですけど、御當人は權式ぶつて賣らないんです。それが、今日のたべものにも困つた時には、威張つてばかりはゐられないで、誰かの世話で安つぽく賣つたりしてゐたやうでした」

「リーの繪は金になるやうな繪なのか。東京では誰に繪を習つたんだらう」

「誰にも習はないで、勝手に書いてたんぢやないかな」

この住宅管理者のHは、美術書や文學書の雜書は、多年暇にまかせて讀んでゐるので、ゴッホとかゴーガンとかの西洋の美術大家の名を擧げて、リーの繪を批評したりした。かういふところは田舍はのどかである。

「どんな繪か見て見ようか」

鐵造はしみ〴〵見たことのない林藏の繪を彼の死後に改めて見ようとした。

主婦は需めに應じて、三四點の、書きつ放しの繪畫を、二階から持つて來た。それ等を、手頃な高さの用簞笥の上に陳列して、三人は目を注いだ。靜寂な空氣のなかに、二三匹の蚊が微かな音を立てた。

三人とも、美術の鑑賞力はないのである。鐵造の如きは、古今東西の名繪畫を、模寫や寫眞版ではなく、正眞正銘の本物で觀てゐるのだが、それ等の作品の眞價に徹しては何も知らないと云ふほどに、鑑賞力を缺いてゐるのである。たゞ美術品とは美しいもの、繪畫は綺麗なものと、世間並みに思つてゐたのであつたが、今目に映るリー兄さんの繪は美しくもなければ、綺麗でもなかつた。晴れ〴〵しいところはなくつて、陰氣な繪である。海も山も樹木も人も、むしろ汚らしい。不潔のかたまりのやうな彼の書いた繪は、このあたりの風光明媚な海邊や丘陵を思ひ切り醜化したやうなものであると、鐵造は感じた。

「しかし、素人はこんな風に汚く書くことも出來まいね。不潔に徹した人間の書いた繪らしく、汚さに徹してるのかも知れないね」

「右の方の木の枝は肩を怒らせてゐるやうにイカつい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com